博士論文執筆の経験から

平成18年３月修了生　**猪狩恵美子**
（福岡教育大学特別支援講座教授）

皆さんのお役に立てるのか、不安だったが、とくに現職の教員として博士論文を「書くことができた」経験をお話させていただいた。

私の研究題目は「通常学級在籍の病気の子どもの困難・ニーズの実態と特別な教育的配慮に関する研究」である。大学卒業以来、東京都立養護学校で勤務し、養護学校の教育形態である訪問教育にも携わってきた。訪問教育は障害が最重度の子どもも、小児がん等で入退院を繰り返す病気の子どもも対象にしている。重症児の教育保障が充実してきているのに比べ、なぜ通常学級との狭間にいる病気の子どもの教育が進まないのか ― という疑問、病気の子どもの教育＝「障害児教育」という枠組みでは解決できないのではないかと思っていた時、学芸大に特別ニーズ教育という専攻があったことが、50代直前の大学院進学を決意させた。それまで考えてもいなかった選択だった。

ちょうど日本の特殊教育が行き詰まり、次の方向性を模索し始めていた時期。そういう意味では、時代のダイナミクスを感じながら、学び、研究することができ、大変手応えを感じた修士課程だった。このことが、もう一つの扉＝博士課程進学につながったのだと思う。

全く学問とは遠い場所にいた私が、修士課程で苦労し、また学び直したのは、研究スタイルと方法であり、自分なりの仕事と研究の棲み分けが身に付いたのもこの２年間だった。そして、ここで基本的な視点と問題意識を鮮明にできたことが博士課程３年間の土台になったといえる。

しかし、博士課程は現職教員にとって夜間しか時間が確保できない上、さらに研究的にはレベルアップが求められるという点で大変厳しい。それを支えたひとつは、同じ研究室で一緒に学んだ博士課程の先輩の姿だった。ひとつひとつの課題を積み上げていけば成果が生まれるということをそばで学んできた。

研究の方法論的には、仮説をもとに確信をもって、かなり冒険ともいえる調査に踏み出すことができたと思っている。

世代的にいえば職場でも責任が求められる時期の博士課程は決して楽ではない。自分なりに整理していたことは次の６点であった。

1．自分はなぜ博士課程にいるのか、すなわち自分の原点は何かに常に立ち返ることが、前向きな生活につながる。
2．「忙しい」をいいわけにしない。忙しくて当たり前、自分が選択した道に自分で責任を持つことだと思う。でも、ほんとうに仕事も研究も忙しいので、まとまって集中する時間があるとは思わない。毎日、たくさんはできなくてもいいと割り切り、その代わり、何もしない日が絶対にないように、と決めていた。
3．先行研究のレビューをていねいにする。その中で自分の問題意識を鮮明にする。
4．研究の節目をつくる。学会発表・投稿は厳しいがそこで研究がまとまり、整理される大変重要な節目。髙橋智先生にそうした機会を積極的に設定していただいたことが博士論文完成のゴールにつながっていった。
5．自分の研究に狭く絞り込むのではなく関連分野に目を広げ、自分の意識を鮮明にしていく。自分の研究の意味・手応えを実感し、また関連する領域の方とのネットワークが生まれたと思う。

「現職は大変」というのは事実であろうが、研究と現場という２つの活動の場を持つことには、気持ちを切り替えながらバランスがとりやすいというメリットもある。焦らず、気分転換と割り切れば、対立的なものではなくなってくると思う。日々の教育実践においても新しい時代の要請、子どもの発信する課題は山積している。近道はないが、博士論文執筆は自分の仕事を深め、展望を拓く上でも大きな手応えと意義のある機会だと思う。